



1988年、奈良女子大学家政学部生活経営学科 卒業
大阪ガス株式会社 入社。商品開発部を経験し、
1991年より現職。関西、特に大阪のまちの資源を
再発見するフィールドワークを重ね、都市の個性や
文化的魅力を探求。1996年には應典院再建プロジ
ェクトに参加。「應典院コンセプトブック」の編集
に携わる。主な著作に「大阪まちブランド探訪」(創
元社)「大阪 水の都に浮かぶ劇場」(K&B出版)「大阪力事
典編・共著」 「大阪まち物語共著」(創元社) など。その他、
大阪府景観審議会委員、淀川河川公園基本計画改定
委員会委員(国土交通省)、フェスティバルゲートあり
方検討委員会(大阪市交通局)、他、活動の幅も広い。

大阪のまち物語を 再編集して 魅力と価値を翻訳する

一年間の五月病

吹田生まれの西宮市育ち、社会人生活は奈良から通い始め
ましたが、ずっと大阪のまちにこだわった仕事をしてきてい
ます。大阪ガスには男女雇用機会均等法制定後3年目となる
88年に総合職として採用され、入社しました。家庭に近い業
種ということもあるので、女性の視点を商品開発に活かして
という意図もあったのか、最初は商品開発部に配属となりま
した。文化系出身のために、3年半事務管理をした後に、今

「大阪再発見・なにわの語り部」
の取り組みを通じて大阪の魅力
や潜在力を発掘する栗本さん。
実は應典院に出会うきっかけも、
語り部の活動でした。地元の方
も外来の方もともに楽しめる
新しい集客やまちの活性化にも
関心を向ける「翻訳家」と語る
栗本さんに、これまでの経過と
これからの展望を伺いました。

一心寺の仮設小屋での公演のことコマ



語り部とツアーという2つの柱

の部署（以下、CEL）に異動となりました。当時は文化や観光などに対しては今ほどの理解や評価もなされていない時代でしたが、CELは一人の生活者の視点で生活文化や環境問題など世の中の課題に接近し、提言をまとめ、人脈をあげ、今後のあるべき社会像を広く発信していました。通常、新人社員は与えられた仕事をまとめていくことが多いのですが、当初のCELでは自らが明らかにしたいテーマを設定し、比較的自由な研究活動が許されていました。最初の2ヶ月くらいは「ワイイ」と、その自由さを喜んでいたのですが、自分なりのテーマを見つければは相当な試練で、いったい社会人として自分は何をやりたいのかと、非常に悩みました。実際、生活文化に関しては知識や経験が豊富な先輩がものすごくいらっしやるわけです。そうした方々がCELに来られて名刺交換などをすると、私自身は名刺を頂戴してうれしくなるものの、自分の名刺を渡しても全く重みがないのではないかと、つまり自分には何の価値もないのではと、悩む時期が1年くらい続きました。「一年間の五月病」でした。

「一年間の五月病」が打破されたのは、歴史、文化的な側面から大阪のまちの魅力や潜在力を発掘して発信する「語り部」

いは増えず、地元の方、外来の方、それぞれに楽しんでいただけるようなガイドツアーの取りまとめや、内容を紹介する仕組みがないことに気づいたためです。そこで、大阪のまちの資源をまとめた書籍「大阪力事典」を編集、発行しました。そのプロセスで明らかになった多くの「点」を「線」に、また「面」にするよう、大阪市立大学の橋爪紳也先生やJCOMの母倉修さん、

また大阪商工会議所や大阪市の協力を得て、コミュニティツーリズム研究会という会を立ち上げて活動しています。それまでも、大阪市に提案を重ねており、昨年からは、学芸員が案内する船場近代建築ツアー（まち歩き+グルメ）、Podを採用したまち歩きツアー、などに反映されました。

大阪再発見の「翻訳家」として

魅力的で面白いことが学問の域に入りすぎて一般の人に届いていないことが多いので、一緒にその文化的価値を楽しんでいけるように翻訳すること、これが自分の役割だと思いい

の活動を創出できたからです。昨今言われているような文化立都、ビジットジャパン、着地型観光などの概念が芽生えていない当時、文化が不毛でガラが悪いなど、あまりに大阪が悪く言われ過ぎていた気がしてなりません。そんな時、上司が、当時事務所があった阪急ランドビルの15階から街を見下ろしながら、古地図を片手に、大阪のまちの歴史や文化の魅力が私に語ってくださいました。そこで、曾根崎心中の舞台が梅田であるということに着目して、古地図と現代の地図を重ねたり、実際にまちを歩いてみたり、という具合で、地道なまちの変遷を辿っていかうと考えました。

ちょうどその頃、一心寺の横にあった生花市場を仮設小屋にして地域活性化をしようという話を伺いました。そこで、「なにわの語り部養成講座」の一環としてミュージカル仕立ての曾根崎心中を上演したのです。すると250人ほどのご来場と大きな拍手をいただきました。20代の終わり頃までは人前で話をするのは不得意でした。ところが、時代考証をしながら、現代との比較のなかで、土着の文化や街の可能性について物語をわかりやすく演出して伝えることにハマってしまいました。

その後、集客やまちの活性化について関心を向け、コミュニティツーリズムの研究と試行に取り組んでいます。というのも、研究活動の一環でフィールドワークを重ねながらも、いくつか研究会を立ち上げ運営してきましたが、街の賑わ

めていきます。そのため、まちを歩き、カメラマンと撮影を重ねて、先端的な新しい部分をうまく肌で感じていただけるよう努めています。その中で出会った人々の熱い思いを、『大阪まちブランド探訪』『大阪水の都に浮かぶ劇場』という2冊の本にまとめ、最近では、月刊誌「大阪人」や新聞「フジサンケイビジネスアイ」の連載にも新たな情報を紹介させていただいています。また、朝日新聞社の協力を得て、この3月には梅田のフェニックスホールで「なにわの語り部春の章〜四重奏との饗宴」という催しをさせていただくなど、書物以外にも多様な形で大阪のまちの人間の息づかいを表現しようとして取り組んでいます。

應典院には、主に再建プロジェクトに関わらせていただきました。たまたま秋田住職が語り部養成講座の一期生として参加されたのがきっかけです。應典院は私を育ててくれたという思いが強い場所で、多くのイベントで運営側としてお声掛けをいただき、若い年りの感覚をどう發揮するかを考えさせられました。数年前には、年末の「自分感謝祭」という恒例イベントで、精神的に救われたこともありです。

今後、成熟した應典院の「場」の力や人脈を拝借しながら、コラボレートして、人やまち、スタッフとして関わった方たち全員が元気になるような試みができればいいな、と思っています。

（構成・山口洋典／應典院主幹）

【トークサロン】

應典院が描くアートの軌跡

～ 10 年を振り返って～



應典院の 10 年を振り返りつつ、なぜ、お寺でアートなのか。
その意味と意義を明らかにするために、座談会形式で語り合いました。

[構成：編集部]

<出席者>

松本 薫 《大阪府立現代美術センター主任研究員》

西島 宏 《株式会社シー・エヌ代表取締役・應典院寺町倶楽部専門委員》

城田 邦生 《應典院寺町倶楽部スタッフ・應典院主務》

〔進行〕 **山口 洋典** 《應典院寺町倶楽部事務局長・應典院主幹》

(2007.8.6 実施)

大阪府立現代美術センターの「大阪・アート・カレイドスコープ」や、大阪市現代芸術創造事業としての「築港ARC」の展開など、應典院寺町倶楽部の活動の中で大きな位置を占めるのがアートの実践です。2006年度には、大阪市の現代芸術創造事業を受託し、アトリソースセンターby Outenin（愛称：築港ARC）を開設するなど、活動の幅も広がってきています。

多くの方々の多彩な表現に見られる創意工夫、また表現に対するそれぞれの熱意、さらにはそれらの熱意を携えつつも思いを可視化するために用いられる各種の技術、それらの絶妙な掛け合わせの中で、應典院という場がアートの拠点となってきたと言えるでしょう。そこで、この間の取り組みを振り返りながら、人々の創意工夫を通じた表現活動がなされる場の意味、意義に接近します。

— 劇場寺院、應典院を語る。 —

「創・意・技」の「コラボレーション」の場

p.5-10…… トークサロン「應典院が描くアートの軌跡」
p.11……大阪・アート・カレイドスコープ2007より
p.12-13……salut ギャラリー「tsubomi」平丸陽子
p.14-17……築港 ARC イベントレポート

■ 特集「アートなお寺とは？」

■

——では、まず、それぞれ應典院との出会いやつながりなどの「馴れ初め」を、自己紹介も兼ねてお話しただければと思います。

西島：元々、個人的に秋田住職とのつながりがあったて、應典院の再建前からいくつかの活動をお手伝いしていました。そんな折、秋田さんに「実は應典院を再建したい」という話を伺って以来、これまでずっと関わってきています。應典院の再建プロジェクトではコンセプトづくり、再建後はお芝居やパフォーマンスアートができる空間を活かすためにソフト部門で知恵を絞る役を担うことになりました。いずれも、住職がしたいことを形にするため、外部のブレーンとして役割を果たしてきた感じですね。例えば、当時「アート説法」と呼んでいたのですが、演劇的な知恵を使った新しい説法の演出と進行もお手伝いしました。ですので、元々應典院は本格的な小劇場で演劇などが行われるのではなく、秋田さんのやりたいことができる場所と認識していましたね。

松本：関わりの始まりは、やはり「大阪・アート・カレイドスコープ」展ですね。第2回以降毎年ですから2005年からです。そこから、いろいろな他の事業へと関わり方が広がってきました。西島：なるほど。ただ、再建から関わっている者からすると、正直、これほど社会化された存在になるとは想像していなかったん

——そうした場所の力ほどのあたりで感じられますか？

松本：軸足は宗教的な部分にありながらも、自分たちで垣根を設けることなく宗教界以外と交わり、交わった後の境界やその後の段取りは自分たちで整理していくという姿勢が何事にもあるように思えます。むしろ行政の方に、特定の宗教、宗教法人と関わる事の難しさがあります。そうして他者との境界線を常に自分たちの立場で書き換えているからこそ、場所の使い方にしる事業の組み方が非常に面白いものになっていると思っています。

——城田さんは、外部の利用者から内部のスタッフへと移行した訳ですが、應典院に対する印象や心境の変化はありますか？

城田：初めての関わりは再建して2年目くらいでしょうか、劇団で公演したときです。通常、お寺を使わせていただく際、本堂を貸していただくことは希です。が、應典院は本堂そのものが劇場になっていることに新しさを感じ、関心を持ちました。その後、劇団としても、また個人的に技術ボランティアとしても関係が深まり、2年半前に正式なスタッフとして迎えていただきました。

ですよ。もう少しプライベートな空間かなと。昔、よく島之内教会というところでお芝居がされていた。ただ、そこでは教会が積極的に場を貸すと言うよりは、劇団が貸して欲しいと言っていていたという状態でした。應典院も同じような枠組みかと思っていました。しかし、結局、應典院は、劇場ということを出して積極的に働きかけていかないと使ってもらえないとわかりました。

——96年にまとめられた「應典院コンセプトブック」に示された具体的な発想を具体化する見通しが弱かったのでしょうか

西島：どうすれば開かれたお寺になるか、半信半疑でしたね。

——松本さんはいかがですか？

松本：私に関わるころには、すでに應典院はその名声がどろいっていました。大阪府の他の部局の事業でも住職にお話を伺っていたのですが、社会に積極的に関わる姿勢は、「アクティブ」で「アグレッシブ」だなど思っていました。そして、映画のプロデューサーをされていた住職がいるお寺が、どのように場所を使っているかの場面を何度か見るにつれて、単にお寺を開くというレベルではないと思いました。もちろん今も、この場所を現場として隅々まで活用する、すごい取り組みだという印象を持っています。

應典院を使う側から開く側へと立場は変わりましたが、こうした場があるからこそ、自分たち演劇人は表現ができるのだという想いに変わりはありません。だからこそ、應典院という場に関西小劇場界の皆さんが愛着を持ってくれているのだと思います。ちなみに、内部のスタッフが動く前に、外部の利用者の方から気になる部分を指摘いただいて、さらにボランティアで修繕をしてくださることもあります。このことは、その昔、民衆がお寺を支えたことと似ている気がします。應典院には、使う側が使う場所をよりよいものにして下さる何かがあります。

西島：再建当初は、アートをする空間としての人的配置が全くなされていない状態でした。アートをするためには、使う側がなんとかしないといけない時期が続いていたんですね。逆説的な言い方ですが、その辺が愛着を生んだ要因かもしれません。

——そんな中で、98年に舞台芸術祭という企画が始まるわけですが、その背景や目的は何だったのでしょうか？

西島：せっかくの空間ですから、パフォーマンスアートの方々

NISHIJIMA, Hiroshi



パフォーマンスアートの方々にはホームグラウンドとして活用して貰う必要があるなということは何となくわかってきました。

にホームグラウンドとして活用される必要がある、と考えたためです。今でこそ演劇祭という性格ですが、当初の space × drama は舞台芸術祭の名のとおり、お芝居だけでなく、音楽やダンスなど、様々なパフォーマンスアートを対象にしています。しかし、回を重ねる毎に、お芝居の人たちが最も愛着を持って、自分たちの拠点として位置づけているとわかりました。そういう意味では、space × drama は應典院という場が誰に望まれているか、マーケティングリサーチの機会となったように思えます。

城田：初期にそうした試行を重ねていたからこそ、應典院は演劇人を応援しようと、若い劇団を下支えする演劇祭になったんです。

西島：そうした動きの中で、小劇場で活動している劇団には、應典院が劇場であると認識してもらった場面が増えました。また、借りてくれた人たちにとっては精神的な拠点になったわけです。

城田：自分が主担当として関わったこの3年間は、若手を育成しようという理念を掲げ、劇団と協働する演劇祭を創りました。劇団と劇場との間だけでなく劇団同士の関係構築を通じて、お互いに高め合う雰囲気も創ってきました。そうした場を経験することが、演劇祭終了後の活躍にも反映しており、大きな成果となっています。

1クの構築を行っています。それをアーティストと共有できたことが意味のあるコラボレーションだったと思います。

城田：第2回ときには、私が主宰する「劇創ト社」という劇団が荒島さんと子さんのオブジェのある本堂で公演をしました。他者の作品があるという貴重な空間での芝居はおもしろかったです。第3回の大久保英二さんの「遊行のフォークロア」のときには、窓口は当時スタッフだった大塚さんが担っていました。スタッフとして関わらせていただきました。それらを通して感じたのは、展示の空間と劇場が一緒になることができる、ということ。劇場で、少なくともアートの展示を行うのは金額的に合わない、と思いつつも、それができるのが大きな価値だと思いましたね。

——皆さんの立場で應典院に残されている可能性や課題は何だと思われませんか？

西島：劇場は、レンタル劇場とプロデュース劇場の、大きく2つに分かれます。時々應典院はプロデュース劇場と勘違いされることがあるのですが、純然としたレンタル劇場です。しかし、プロ

——では、大阪・アート・カレイドスコープに関してはいかがでしょうか？なぜ、なぜ應典院だったのかなど開催に至った理由や、お寺で展示した成果をお教えいただけますか？

松本：第2回から協力をいただいています。明確に應典院の場の価値を考えて企画をお願いしたのは、第3回からです。第3回は、大阪の主立ったアートNPO8団体に、それぞれの活動内容やミッションをカレイドを通して発信していただくというものでした。中でも應典院寺町倶楽部は、広域行政である大阪府に対してコミュニティに密着した活動をしていること、また活動内容が広がりつつあるアートの領域のなかで重要な部分を扱っているのではないかと考えました。第4回は、それまでは室内を中心にした展示の企画だったのに対して、上町台地という地域全体を見ていく企画でした。アートの分野や手法が拡大していくなかで、大阪の文化遺産や歴史遺産に着目していこうと、地域資源にあふれる上町台地にある應典院をお借りしたわけです。南雲由子さんと平丸陽子さんの展示をしていただいたわけですが、應典院は、いのち、終末期、ケアなど非常に広い分野にわたっての問題提起を行うことで、どうやって都市のなかでコミュニティが生き残り、人々の連帯をつくっていくのかを考える契機をつくり、ネットワ

デュース劇場としての方向性を模索しなくなることがいざしれあるように思えます。その際には金銭面を中心に、枠組みを大きく変えていかなければなりません。プロデュース劇場になりたくても、レンタル劇場であるという温度差を、今後どういう風に埋めて行くのかが大きな課題ではないでしょうか。

城田：西島さんのお話に通じるのですが、今後、應典院は何をしてくれるのか、そんな風に考える劇団が増えてきているように思えます。そのために、新しい枠組みづくりを模索していかなければならないと感じています。これはアート部分も同じですが、

松本：今のところ、秋田住職が作家を受け止めていた状態ですが、これからは、アーティスト側も應典院側が持っている宗教観や教義といった前提を揺るがす関わりがないと、アートの意味がないような気がします。アートが癒しやエンターテイメントの要素になることもあるのですが、全くコミュニケーションが成り立たないところをつなぐ道具になるのがアートのはずです。もともと宗教空間は、アーティストがそこに身を置いて、自由に活

MATSUMOTO, Kaoru



もともと宗教空間は、アーティストがそこに身を置いて、自由に活動に取り組みア
 ジール（避難場所）であり、場とアートがともに影響し合い変化してきました。

動に取り組みアジール（避難場所）であり、場とアートがともに影響し合いそれぞれ変化してきました。そうして、アートが應典院を揺るがすような機会を生み出していけるといいですね。

西島：そうですね。これからは、秋田住職個人で成り立ってきた場とは違うかたちを考えていかないといけないですね。もちろん、今までの10年と同じ事をもう10年でできそうな気がするのですが、それでいいのかなど。

松本：ええ。應典院が宗教法人として、また應典院寺町倶楽部がNPOとしてネットワークの中で舞台芸術やアートとどのような関わっていくのか。山口さんや城田さんのような専門職のスタッフがいる、その前提で何をすべきなのか。このように、もっと引いた目で、関わる側も関われる側も、その提案なりを考えていくと、コラボレーションの意義が深まっていくように思えます。

西島：なるほど。そういう意味では、浄土宗のお寺としての應典院はあまり見えて来ないですね。お寺という枠組みの中で、お寺が普通はやらないことをやるだけではなく、お寺が普通やらないことをやることで浄土宗の教団や教義にどんな影響を及ぼしていくのか。應典院という場所がお寺であるという原点を考えて、きちんと整理していかねばならない時期なのだと思います。

大阪府立現代美術センター主催「大阪・アート・カレイドスコープ2007」
公募作家作品「ノッキング・オン・ヘヴンズ・ドア」(2007.3.1～21)



あの窓に触発されて行った今回の作品で、私は、遺影を撮るという行為から「向こう側のもの」を知ろうとしたのだと思う。

「向こう側」を考えることから、今在る「ここ」を把握する。

モデルの皆様、協力者の皆様と、3週間お寺に泊めて頂き、大阪の「うまいもん」をおごって頂き、たくさん会話をしてくださった秋田住職に、心より感謝。

場を変えても私はこのプロジェクトに今後も取り組みたい。



南雲 由子

城田：一心寺シアターは完全にお寺とは切り離して運営しています。御上人が来て話をすることもありません。その点で應典院は希有な存在です。仕込みの初日の搬入前に僧侶による説法があって、ご本尊がいらっしやる空間で演劇をする、というのは凄い話です。最初に利用したときには、取り外されるものだと思っていました。良い意味でも悪い意味でも、違和感がある空間ですよ。

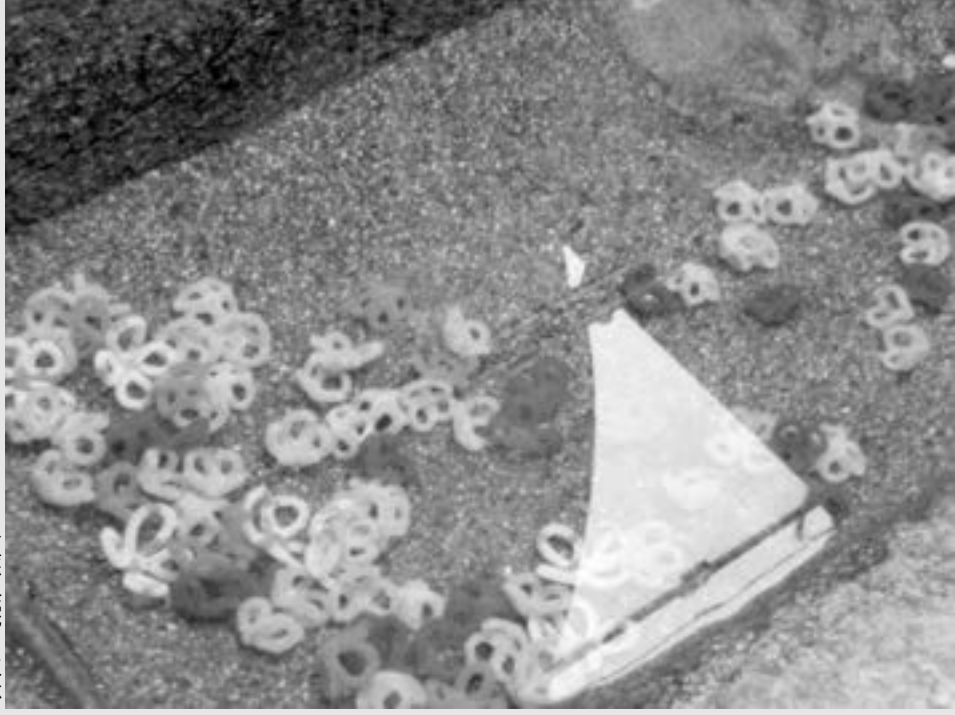
西島：應典院で行われるアートについても演劇についても、そうした精神面な部分を特に大切にしていける時期かもしれません。次の10年は、場所を使ってもらう人と提供する應典院との間で、また應典院が仕掛ける催し毎に、それぞれバラバラになってしまいがちな思いを、どう線につなげるか考えないといけないのでは？

松本：お寺の原点復帰だからこそ、海外からも視察に来られていると思うんです。だからこそ、そうした注目や期待をどういう形でまとめていくことができるか、さらには日本の国内での演劇やアートのネットワークの中に、その他のお寺や宗教を巻き込んでいくことができるかを考えていく時期ではないでしょうか？

——應典院はそこに集う人々の生き方をどう揺るがし、どう救済できるのか。これを表現の方法や実施の主体や宗派なども超えながらどう実現していくかですね。ありがとうございます。



◀ 應典院・エントランス



▶ 應典院・水鉢

『tsubomi』 平丸陽子 HIRAMARU Yoko
1979 埼玉県生まれ / 2002 東京造形大学絵画科 卒業 / 2003 東京造形大学研究科 修了
2007 大阪・アート・カレイドスコープに出展。源聖寺と應典院でモールを使った作品を展示



▶ 源聖坂

築港ARC イベントレポート

関西のアート情報発信拠点として、またアートに関わる第一歩を踏み出すサポートセンターとして活動する築港ARC。最近では通常のライブラリー、相談業務もさることながら、アートと社会を繋げる月例トークサロン「ARCトークコンピレーション」や子どもを対象にしたコミュニケーションプログラム「漕ぎ出す表現ワークショップ」が精力的に開催されています。その二本企画をチーフディレクターの朝田亘とスタッフの蛇谷りえがレポートします！

ARCトークコンピレーション

関西でとりわけ実験的なプロジェクト、スペース運営を手がけるコーディネーターやアーティスト、またはメディア、福祉、教育、環境、医療、食、地域づくりなどなど、幅広い分野でクリエイティブな実践をしている方々をゲストにお招きし、アートと日常、アートと社会の関係を再発見できるようなトークを繰り広げています！

ここでは、5月〜7月の開催内容をレポート。古本屋経営から関西の実験音楽シーン、市民メディアの実践まで極めて多種多様なジャンルのトークが繰り広げられました。【朝田】

6/16



レコード史から読み解く
関西オルタナティブ
ロックシーン考察

剣樹人（ミュージシャンex.ミドリ／恋愛研究会。）（写真左）
チエルシイ杉本（チエルシイレコード店長）（写真右）

関西の実験的な音楽シーンを1970年代後半から2000年代まで、築港ARC独自の編集方針で体系化したこの回。とりわけ大阪という都市は昔からカウンターカルチャーが多数勃発する町なのだなど感じつつ、同時にシーンの担い手（生産者）と消費者の距離が比較的近いのも特長なのではないかと感じました。資本主義的、マスメディア的な既存の枠組みに収まらずに、瞬時瞬時にシーンを立ち上げていくそのエネルギーというものは音楽シーンに限らず今も昔も関西に根付いているものなのだ改めて実感。ちょっと個人的にも勇気をもらった回でした。

5/19



思考する古本屋
メガネヤ

市川ヨウヘイ（古本屋メガネヤ店主）

プライベートな自宅スペースを古本屋というパブリックな場所に変えてしまった市川さん。店では市川さんの生活の痕跡がいたるところで発見できる。「ほんとにごく本屋なん!？」といった感じ。もちろんスペースのあり方も面白いですけど、もっと興味を引いたのは市川さんの仕事に対する考え方で、市川さんいわく「古本屋の仕事、それは本を通して世の中の趣味や興味と関わり、古本を通して本を売り買ひする人とその気分に触れるということ」だとか。新品の本には現れない個人の記憶が存分にこめられた古本、それをまた別の人に繋いでゆく永遠のループを、まるで仙人のように舵取りしている市川さんの活動。今後も期待できそうです。

7/21



オルタナティブメディア
映像発信てれれの実践

下之坊修子（映像発信てれれ主宰）

「テレビや新聞だけがメディアではない！」というところで、誰もがビデオカメラを自由に使って身近な社会を取り上げて表現する試みをされている下之坊さんにお話を伺いました。非常に関心したのは、映像作家である下之坊さんは、自分の作品を作ることだけに終始せず、誰もが作品を発表できる場を作りあげてきたということ。完全無審査方式でプログラムを組み、カフェで上映していくこの「カフェ放送てれれ」という試みは、今後さらに認知されてくることでしょう。同じくネットラジオなどのメディアで情報発信をしている築港ARCとしても大いに参考になるお話でした。

漕ぎ出す表現ワークショップ
「ハジメ、の海と、そびそび、の空」

ことばや身体を使った芸術体験をすることによって、子供たちが自由にいきいきとコミュニケーションすることを目指したこのプログラム。各回、普段何気なく使っていることばや身体に少しずつ焦点を絞っていき、ことばや動作そのものの表現を体験していきます！【蛇谷】



チームに分かれて朗読内容をチェック！
色々な読み方を試してみよう

語をイメージすること」に焦点を合わせることで、歌をいれたり、出てくる登場人物に合わせて台詞担当をつけたりと何気無い朗読に厚みや空間ができ、どちらのグループも立体的で幅広い朗読が完成しました。

7/29

Ver.3

「朗読しよう！」(その2)

第3回目の漕ぎ出す表現ワークショップのテーマも「朗読」。今回の「朗読」は言葉が持つ「意味」の力を使わずに、ジブリッシュというメチャクチャ語を用いて声や表情に焦点を合わせます。まず初めにお馴染みのゲームで言葉や身体の体操をした後、思いつくメチャクチャ語を紙に書いて言い合いました。普段から使っている言葉を崩して言葉にするのは意外と難しく、コツを掴むまで苦労している子もいました。ジブリッシュ(メチャクチャ語)は声の強弱やリズムを付けて、頭を使って話すというよりも感覚で話すとできるようでした。

慣れてきたら今度はグループになって、ジブリッシュを使って小さいお芝居をしました。お互いにコミュニケーションを取れてきたら、みんなの前で

6/24

Ver.2

「朗読しよう！」(その1)

今回で第2回目となる漕ぎ出す表現ワークショップ。まず初めにくじを使い文章や単語を組み合わせて物語をイメージする言葉遊びをしました。「(神様)の半分は(やきとり)」など、紙を引いては不思議な文章が出来あがり、くすくす笑い声が聞こえてきました。

物語をイメージすることに慣れてきたところで、今回のテーマ「朗読」をします。みんなハキハキとした大きい声で本読みができていて上手。そこから「ゆっくりのんびり読んでみようか」「ひそひそ話のような声で読んでみて」など、いろんな読み方を実践してもらい、同じ文章でも読み方を少し変えるだけで、印象が全然違うことを感じてもらいました。また「マ行」「バ行」など一つの行だけで言葉を使い、声の強弱・動作を用いて小さいお芝居をしました。

最後は再度朗読。今度は2つに分かれてどんな風に読めば、物語のイメージが膨らむかを、グループで相談しながら朗読を作っていました。「物

ブリッシュを使ったお芝居をしました。即興でお題が観客側から飛び交う中、動作や言葉の強弱をしっかりと出せてうまく表現できていました。

最後はみんなで物語をイメージしながら、声そのものに意識して「やまなし」と「100万回生きたねこ」を朗読しました。次回9月30日での連続ワークショップは最終回です。初めての方でも参加しやすいプログラムをご用意しています。是非、お越し下さい！



ジブリッシュで小芝居実演！
恥ずかしがらずにできるかな？

「場」の胎動の季節。 その力はお寺に集う人が導いた。

本当の「場」のあり方とは

97年應典院落慶、その最初の催しは、これからの應典院を展望するものでなければならぬと、秋田光彦住職は強く思っていた。むろん、招聘するゲストには知名度も必要だ。そこで、旧知の写真家、橋口譲二さんに1年ほど前から相談し、新刊「職 1991〜1995 WORK」の写真展の開催を持ちかけた。應典院の構想に強い共感を抱いた橋口さんは快諾の後、写真展開催のノウハウを伝授してくれた上、協賛金捻出のために、リクルートやキャノン

が、語りの場に人々の「縁」の渦が何重にも生まれた。そのカオスのような渦の中、橋口さんは実に誠実に、丁寧に、一つひとつの人、こと、場面に向き合っていた。認知度の乏しい場所での写真展ゆえ、連日盛況というわけではなかったが、2週間の会期中、大阪に泊まり込み、ほぼ毎日、写真展の傍に立ち会った作家の意気や責任に触れられたことも、忘れることができない。つまり、橋口さんは、「職」の写真展を通して、應典院に対し、本当の「場」のあり方について尊いメッセージを与えてくれたのだ。

劇場寺院への暗中模索

97年は、まさに暗中模索の一年であった。同年、神戸のA少年の事件や有名企業の相次ぐ経営破綻など、日本社会全体が目に見えない不安に駆られた。宗教に対する漠然とした期待や不安やおそれが緋い交ぜとなって宗教学法が半世紀ぶりに改正、その渦中にあるべきは連日メディア報道された。名が浸透すれば、さまざまな来客を迎える。靈感ビジネスやカルト教団から会場利用の相談の訪問も受けた。一方で、心の悩みを持った多くの人々（鬱病や人格障害、また自傷

といった在東京の企業との間を取り持ってくれた。

橋口さんによる「職」の写真は、日本人にとって「働く」とは何かを「職」を通じて問うた問題作でもあった。会期中、橋口さんは写真集に登場した職に生きる方々を招き、写真の森となった應典院にて、参加者と語り合うトークショーを連日開いた（最終日のゲストは鎌田慧さん）。ここでは日常を生きる中でのナラティブ（語り）に着目することの魅力や価値が浮き彫りにされた。橋口さんは今の應典院に通底する、場の根本原理を應典院に投げ掛けたのである。

また、著名な写真家である橋口さんゆえかもしれない

行方不明が、お寺にこそ心の拠り所を求めて相談にも訪れた。秋田が連日の来訪者の応対に忙殺される中、肝心の劇場機能としての應典院はまだ鳴かず飛ばずだった。おそらくは寺が小劇場として開放されているなどは、誰もが俄かに連想できなかったのだろう、利用頻度もきびしい状況が続いた。それを転じたのが、97年の10月に開催した第1回の舞台芸術祭である。新進劇団として注目されていた南船北馬一団や舞踏家の上海太郎さんが上演し、平田オリザさんによる演劇ワークショップが開かれ、これらが呼び水となつて、次第に劇場寺院・應典院の認識が広がっていった。

翌98年からは、秋田のネットワークを駆使し、多くのNGO・NPOに活動場所としての活用を呼びかけた。また、金香百谷さんや上田紀行さんを講師に招き、市民活動家たちの出合いの場としてプロデュースも心がけた。当時の自主事業のひとつには、参加無料の「トークサロン」があった。これは参加資格を問わず、ただお寺に人が集まり、当日出されたお題について銘々が対話するという場で、最盛期の参加者は1回30人を越え、語りによるゆるやかな共同愛に包まれた。秋田は結論を求めないファシリテーター（進行役）で、ここで傾聴の重要性を学んだという。トークサロンは97年から99

年3月まで、毎月開催され、その精神は2000年から開催された「いのちと出会う会」へと継承されていく。

お寺と市民団体の「葛藤」

應典院で各種の事業を主催する應典院寺町倶楽部は、應典院プロジェクトを塑型に、應典院と同時に発足したNPOである。当初から芸術やNPOを支援すると位置づけていたわけではなく、應典院というお寺の応援団という形で発足した。初代の会長は当時パドマ幼稚園の後援会長でもあった田村精造氏で、初年度には350人を越える会員を擁していた。ただし、應典院そのものの方向性も定まりにくい時期であったゆえに、寺町倶楽部の運営に対しても議論百出であった。特に、お寺とNPOの関係、寺町倶楽部に対する秋田住職の関わり方、そして寺町倶楽部の組織としての独立性について議論が交わされ、初代事務局長を務めた西島宏さんには大きな心痛をかけた。

秋田自身が宗教家として市民に向き合って仏教について語りたいという思いを抱く反面、事務局は應典院が社会から認知されていないからこそ宗教性に対して慎重に向き合う

を招いたといってもいい。

市民教育の拠点へ

應典院の場のあり方を試行錯誤するなかで、劇場として小さな成功の後に生まれたエポックが、98年のコモنزフェスタであった。これは大阪国際女子大学の橋本義郎さんに障碍者^が取材した「それぞれの歩き方」という写真展の企画を持ち込まれたことが契機となった。演劇祭と劇団利用が結びついたように、應典院をNPOの拠点として名を知らしめる上で格好の機会となると捉えて、11月3日から13日間、13団体の参加によって総合市民文化祭に取り組むこととした。車椅子利用の参加者も多く、はじめて障碍のある人たちがバリアフリー設計のお寺を迎える機会にもなった。

当時から市民教育への関心が高かった秋田が教育委員会の若手の社会教育主事と勉強会や合宿などを行ってきたのもあって、第1回目のコモنزフェスタは大阪市の生涯学習フェスティバルの一環に位置づけてもらった。行政の立場から見れば、建物ごと生まれた、生涯学習のオルタナティブモデル(もう一つのまち)は脅威であったかもしれ

べきだと牽制する立場を採った。大きな理念を掲げて社会変革に挑戦するからこそ誤解されてはいけないという事務局側の良心と、お寺が取り組む活動としての独自性を急ぐ宗教者の熱意とのせめぎ合いであった。應典院のスタッフが寺町倶楽部のスタッフを兼務するという構造も含め、矛盾と混乱のなか、お寺とNPOはそれぞれのあり方を模索した。結果として任期1年で西島さんは事務局長を退任、應典院スタッフであり調整能力の高い池野亮(当時)が2代目事務局長に着任することとなった。

また当時、應典院寺町倶楽部は理事会組織を採っており、そこには市民プロデューサーと言える逸材が多数いたものの、活動内容よりも、お寺とNPOの関係構築に焦点が充てられた。そのため、関西ことも文化協会等、組織間の連携による催しはなされたが、理事が率先して組織を牽引することにはならなかった。さらに、應典院寺町倶楽部は初年度に「ご祝儀」として入会いただいた方々の更新が滞り、次第に会員数が目減りし、会費収入だけの運営が困難となったため、新たな財源を確保する必要があるなど、新しい課題にも直面した。寺とNPOという最大の特徴が、当初、最大の「葛藤」

ない。国際理解や人権教育など、学びを深め、問題解決の担い手を育成する取り組みを有償で行い、多くの参加者を得ていたのであるから。実際、99年の第18回寺子屋トーク「ノストラダムスをぶっ飛ばせ!」では209人の来場者に、報道番組「ニュースステーション」のオンエアなど、民間による市民教育の拠点として注目を集めた。

第1回のコモنزフェスタでは、全旨のボサノバ歌手が熱唱した。同年8月には太連雲人・ギリヤーク尼ヶ崎さんが境内で踊った。人権NGOと共催した死刑囚の絵画展も圧巻であった。上品にかしこまった芸術ではなく、いのちの隣界に立ちながら、なお表現を追求していくことへの感動と兵感の中に身を置く経験を得た。それはかつて寺という場所が長く支えてきた「異人」「他界」に出会いなおす経験でもあったといっている。むしろかしい理屈に頼るのではなく、アートを手掛かりに、忘れかけたものを再生することはできないか、いのちの文化を創造することはできないか。應典院の現代アートへの関心は、第2回コモنزフェスタにおけるタイのエイズホスピスの写真展を経て、樋口よう子さんをプロデューサーに迎えた99年の第3回目のコモنزフェスタ「JIFE」に帰着していきのであった。

「ひと」と「場」の交差点……

應典院にしき

呼吸するお寺・應典院の、5月〜7月の活動記録です。
関連のエンディング事業なども併せて報告します。

5月

- 2日・主幹が関西広域連携協議会の文化振興施策研究会に参加。4回目。6月末の終了に向け議論。
- 3日「特攻舞台BORDER」公演。6日まで。住職と主幹は、岐阜県の高治見市立平和中学校山田純二校長と法善寺界隈で懇談。
- 8日朝は築港ARCCの月次会議。夜はアーツと仕事研究会の第●回目。ゲストは大阪市会議員の福島しんごさん。
- 11日「演劇集団おぼろげ」公演。13日まで。
- 17日・朝に夏の「エンディングセ

ミナー」のアシスタントスタッフとして起用する藤原篤志くんが来山。夜には第68回いのちと出会う会「死ぬとどうなるのか」開催。講師は心理療法セラピストの得津富男さん。
- 19日「藝術交響空間◎北辰旅団」公演。2日間。事務局の連絡先が應典院となっている「大阪でアーツカウンシルをつくる会」の第一回公開勉強会が○○○○で開催。講師はニッセイ基礎研究所の吉本光宏さん。
- 20日・大阪YWCAで主幹が應典院で「協働」について話題提供。

- 17日・主幹が日本グループ・ダイナミックス学会で「看取りと見送り」と供養のあり方に関する協働想起に関する「考察」と題し、應典院の実践を発表。名古屋大学にて。
- 18日・HAPP説明会。関西創価高校、枚方なげさ高校、工業高校、大阪信愛女学院高校、4校が参加。
- 19日・HAPP説明会。ブル学院高校、鶴見商業高校、関西大学第一高校、大教大附属天王寺高校、4校が参加。
- 20日・写真家の野寺タツヤさん来山。朝日新聞連載内容の写真展を10周年記念事業の一環として開催。
- 21日「第69回いのちと出会う会」子供たち「光を」。講師はカラー心理セラピスト寺田のじさん。
- 23日・霸王樹座公演。2日間。社内研修会として「上町台地からまちを考える会4周年記念シンポジウム」に全員出席。
- 25日 應典院月次会議。第2回「タンマバタ」で学び仏教の基礎知識講座。研修室Bに49人が集つ。

- 27日・築港ARCCと大阪アーツアポリア「なごわと」の合同によるスタップオーブンミーティング。
- 28日・関西広域連携協議会文化振興施策研究会第6回。
- 29日・大阪アーツカウンシルをつくる会 第2回。ゲストはサンクトリーミニシアムの植木啓子さん。

7月

- 2日・日本アートマネジメント学会例会。11月の大会に向け協議。
- 3日・住職と主幹、パドマ幼稚園のサマーコンサートに招待。space x drama2007がLast Hope公演で開幕。2日間。
- 5日・上町台地マイルドHOMEゾーン協議会のまちづくり提案事業のプレゼンテーション。城主務がメイン。主幹、住職陪席。
- 6日・29日の写真展の打ち合わせ。タヒトシさん来山。午後からは主幹と事務局長が全国青少年教化協議会45周年記念大会に参加。
- 7日・もめんじスペース公演。

- 21日・住職肝入りで開講する仏教講座「タンマバタ」第1回。講師は釈徹宗さん。当日申込みも多く、急遽会場を研修室Bから本堂に変更。内容は「タンマバタ」超人入門。
- 22日・築港ARCCにて職員一斉研修会。主幹と朝田築港ARCCチーフディレクターが事業コンセプトや事業内容を説明。
- 25日「Funky Talk Theatre」公演。27日まで。
- 27日・和歌山県NPOサポートセンターで主幹が講演。NPO向けのプレゼンテーション講座。
- 28日・space x drama2007 第6回制作者会議を開催。ウェブサイトで劇評ブログを中心に議論が展開。
- 29日・應典院月次会議。その後、3月の「いのちと出会う会」講師の木戸啓介さん来山。space x dramaの関連映像配信を依頼。

- 10日・築港ARCC月次会議。space x drama2007 参加劇団「突刺金魚」公演。2日間。
- 12日・関西広域連携協議会文化振興施策研究会第7回。
- 13日・水都大阪2009実行委員会が来山。住職と主幹が対応。
- 14日・朗読GEN公演。2日間。午後には夏のエンディングセミナー第1回。午前には主幹がコロリアNGOセンターで研修「よい会議」の講師。
- 16日 第49回寺子屋トーク「風狂をどう生きるか」。ゲストに町田宗鳳さんとフットグラフィアーharaoさん。「感謝念仏」展。
- 19日・第70回いのちと出会う会「いのちは何のものか」。講師は田受寺副住職 松本確一師。
- 21日・HAPP開幕。午後はエンディングセミナー 第2回。住職に大連寺お墓ツアーも併催。夜には大連寺・應典院の境内にて「夏の幻灯会」トークイベント。@ [visual diary / slideshow2007]

6月

- 2日・築港ARCC月次会議
- 3日・コミュニティシネマシリーズ11弾「あかりの里」上映。ゲストに横田丈実監督を迎え住職と対談。制作プロデューサーの赤松亮さんの協力で実現。
- 5日・住職と主幹がプラスアーツの永田宏和さんを住訪。
- 6日・関西広域連携協議会文化振興施策研究会第5回。
- 8日・劇団スケッチブック公演。10日まで。
- 12日・space x drama2007 オープニングイベント開催。昨年とは違って公開型の決起集会。参加劇団のPRと交流会を実施。
- 14日・住職と主幹、外部編集者として協力いたたく長友麻希さんと應典院10周年記念誌の打合せ。平田オリザさんによるの演劇人のための基礎講座。第1回。

- 開催。同時刻にARCCトークオンラインセッションvol.5「オルタナティブメディア映像発信でこれからの実践」。ゲストは映像発信でこれ主幹の下坊修子さん。
- 23日・朝に應典院月次会議。夕方に主幹が大阪府ため池総合整備推進協議会で講演。夜には第3回仏教講座「タンマバタ」は世間をどうつくりか「会場は大連寺に変更。46人。終了後、主幹と朝田築港ARCCチーフが○○○○となりイベントで競演。
- 28日・エンディングセミナー 第3回。1回目・2回目の講師も交えてミニシンポジウム実施。
- 29日・HAPP千秋祭。終了後1階ロビーでスタップ懇親会。
- 30日・主幹、第七芸術劇場で打合せ。10月の「ミニミニシネマ」。
- 31日・space x drama2007 参加劇団、旧劇団スカイフィッシュ公演。夜はアーツカウンシル 第3回。全員限定トークサロン。午前中にはスタップ研修。

應典院寺町倶楽部
主催・共催の催し
ラインナップ

いのちと出会う会

第71回 9月20日(木)

「運命は変えられる」

話題提供者：梅澤千雅子さん

(企業コンサルタント&個人カウンセラー)

第72回 10月18日(木)

「在日コリアンを生きる」

話題提供者：チ・ヨンさん

(ゴイチ(株)代表取締役会長)

第73回 11月15日(木)

「嘆きの中で見つけた感謝という魔法」

話題提供者：入江富美子さん

(映画プロデューサー&監督)

※いずれも第3木曜日18:30~20:30まで
参加費 会員・学生700円/一般1,000円

寺子屋トーク 第50回

「市民の時代のスピリチュアリティ」

9月24日(月・祝) 13:30~16:30

ホスピス・ケア、いのちの教育、こころのケア
……現代人のまなざしは、なぜスピリチュア
リティに注がれるのか。生きることの意味や
拠りどころを求めて、静かに立ち上がる「いの
ちの原動力」の実相に迫る。

第1部「レクチャー」：島藺進さん(東京大学) / 第2部「コメ
ント&トーク」：島藺進さん×関嘉寛さん(大阪大学) / 第3部

「セッション」：島藺進さん×関嘉寛さん×山口洋典(應典院)

参加費 会員・学生1,200円/一般1,500円

※ 閉会后、ワンコイン交流会を開催<参加費500円>

子どものための自由表現ワークショップ

「漕ぎ出す表現ワークショップ “ことば”
の海とそうぞうの“空”へ」第4回

4月から始まった「ことば」シリーズの
ワークショップがついに最終回となりま
す。これまで行ってきた「ことば遊び」
「朗読」。最後は、「二人でお芝居」。これ
までやってきたことばを使った遊びや体
験をお芝居でまとめます。

○9月30日(日) 14:00~17:00

○場所 piaNPO2 階コラボレーショ
ンルーム(大阪市港区築港 2-8-24)

○参加費 500円(資料代として)

○定員 15名(先着順)

○講師 桔梗谷光生(役者/築港 ARC
スタッフ)

應典院再建 10周年記念事業

1997年に再建された應典院は今年で
10年という区切りを迎えました。
この秋、10年を振り返る各種の催しを
実施いたします。(詳細は Web サイトにて)

【應典院コミュニティシネマ Vol.11】

10月8日(月・祝) 13:30~

「終わりよければすべてよし」上映

羽田澄子監督作品。トークのゲストに
桜井隆医師をお招きし、秋田住職と
終末期医療のあり方を対談。

○参加費 会員・学生1,500円/一般1,800円

【野寺夕子写真展「遺影、撮ります!」

10月10日(水)~14日(日)

毎日、作家とゲストによるトーク有。

【船井美佐展「終末の先へ」(仮)】

10月25日(水)~11月25日(日)

2階「気づきのひろば」のガラス面を
使った美術展を催します。

※11月23日(祝)には、24日の日本
アートマネジメント学会プレ企画として、
作家のお話、また北川フラム氏を招いた
シンポジウムを開催いたします。

★お問合せ・ご予約は……

應典院寺町倶楽部

FAX 06-6770-3147

メール info@outenin.com

應典院寺町倶楽部の
ニュースレター

サリュ
Vol.53

<次号 54号は……>

2007年11月発行予定

【特集】：演劇と應典院
~世代を超える知の継承と共創~

space×drama2007とHPF
を振り返りつつ、應典院におけ
るHPFでの演劇人の世代間交
流や、演劇祭参加劇団の協働に
スポットをあて、演劇を通じた
集団による表現活動の意味、意
義に言及します。

■発行日
2007年8月29日

■発行人
秋田 光彦

■編集人
山口 洋典

■スタッフ
池野 亮光

朝田 亘

塩根 春華

城田 邦生

森山 博仁

■発行所
應典院寺町倶楽部
〒543-0076
大阪市天王寺区下寺町1-1-27
TEL 06-6771-7641
FAX 06-6770-3147
E-mail info@outenin.com
URL http://www.outenin.com

編集後記

暦の上では秋ですが、炎暑が続き日本も亜熱帯地域
に metamorphosed したかのようです。涼しくなる頃には、應
典院も 10周年行事が目白押し! 今のご期待。(塩根)

應典院舞台芸術祭「space×drama2007」も無事に
終了いたしました。夏の暑さに負けない6団体の
熱演の余熱がまだ、本堂に漂っているかのようです。
スペドラの詳細は、次号に特集いたしますので、ご注
視ください。今号の座談会でも触れておりますが、こ
の十年を礎にして、次の十年をどうしていくのか。我々、
スタッフにも突き付けられている課題だと感じていま
す。(城田)

サリュを書くという行為は、小スパンで築港 ARC
の事業を総括していることだと思ふようになりました。
今年度の築港 ARC プロジェクトは3ヵ年と半年の
事業の中でも、年間の基本的な流れを決定づける重要
な年です。ひとつのひとりの企画の節目に私をはじめ、
各スタッフの想いがしっかりと読者の方々に伝わるよ
うな記事をこれからも執筆していきたいです。(朝田)

應典院に来るまではパソコンをあまり使って無かつ
た為こんなにパソコンに向かったのは初めてです。
やはりこれまでやってきた内容とは違いまだまだ勉強
不足ですが、初めての應典院の夏も、HPFとspace×
dramaが終わり、これを一つのステップとしてこれから
も頑張っていこうと思います。(森山)

復刻デザインの表紙シリーズ第2弾は、まさに、今
回の「應典院10年史」の頃と重なります。次号
の表紙は、應典院がアートに大きな火輪を切っていっ
た時期のもので、同じく「10年史」の内容と重なって
くると思われます。ちなみに、お手元に「サリュ」が
全号そろっている、という方はどれくらいいらっしゃる
のでしょうか?。ともあれ、特集「演劇」の内容と
あわせて、次号もご期待ください。(山口)

善き人々は 遠くにいても輝く

善き人々は遠くにいても輝く、
雪を頂く高山のように。
善からぬ人々は近くにいても見えない
夜陰に放たれた矢のように。

「法句経」より

應典院寺町倶楽部の
ニュースレター

サリュ

Vol.53

Top Interview

大阪のまち物語を
再編集して
魅力と価値を翻訳する

1

特集「アートなお寺とは？」
「創・意・技」の

コラボレーションの場

4

應典院が描くアートの軌跡
10年を振り返って

5

大阪・アート・カレイドスコープ
2007公募作家・南雲由子

11

應典院に集う作家たち

平丸陽子『tsubomi』

12

築港ARC

イベントレポート

14

應典院10年史(2)

「場」の胎動の季節。
その力はお寺に集う人が導いた。

18

「ひと」と「場」の交差点
應典院につき

22